

学校だより 希望の鐘

ひとつひとつの希望は、ちどりしかひらかない



八戸市立
小中野中学校

平成30年8月28日(火)

No.126 文責: 校長
工藤聰

『KONA © PRIDE』とは「感謝すること」なり

体育祭が終わりました。暑い夏を象徴するような紅軍と青軍の“熱戦”でした。当日は、心配されたカンカン照りにもならず、もちろん熱中症で体調を崩す人もなく、全員が無事に閉会式を迎えることができた一日もありました。

体育祭当日には、若い先生（60歳の私から見れば、小中野中の先生は全員私より若いということにはなるのですが…）の発案で、先生達も体育祭を盛り上げようということで、同じデザインのシャツをそろえました。実は、市中体夏季大会の時もそろえることになったのですが、私に合うサイズがなくて、涙を呞んだ（ナミダヲノム：泣きたいほどの残念な気持ちを抑えること）のですが、今回は「5L」があって着ることができました。かなりダブダブで、「まるでお相撲さんが着慣れないシャツを着ているようだ」と家族に笑われたのですが、私としてはみんなと同じシャツを最後の体育祭で着ることができて、とても満足でした。

そのシャツには、『KONA © PRIDE since 2018』と左肩から縦にデザインされています。紅軍の先生は赤、青軍の先生は青で、それ以外の先生は黄色です。先生のアイディアです。濃紺のシャツに文字が色鮮やかに描かれていて、私はとても気に入っています。

では、『KONA © PRIDE』とは、いったいどういうことなのでしょうか？『コナ中プライド』とは、昨年6月14日発行の「希望の鐘No.88」で初めて私が使った言葉です。そこには、当時のコナ中生に聞いた『コナ中プライド』について書いてありました。「①全力で応援する（一生懸命応援する・あきらめずに応援する・最後まで応援する等）②全力でプレイする（最後まであきらめない・悔いの残らないプレイをする・粘り強く戦う・集中する・気持ちで負けない等）③マナーでは負けない（あいさつをしっかりやる・礼儀正しくする・責任ある行動をとる等）」でした。また、そこからさらに1年前の「希望の鐘No.46」には、「小中野中生の誇り」について、次のように書いていました。

「応援団長の_____さんが、『小中野中生としてのプライドを持って応援しましょう』と言っていました。すごく重い言葉だと思います。『誇り』と同じ意味なのですが、私は『矜持（キヨウジ）』という言葉が大好きです。『自ら頼みとするものがあつて誇りとすること』という意味です。これまで先輩方が築きあげてきた伝統、中学校入学以来取り組んできた練習、心から応援してくれる家族や先生、そして同級生や先輩・後輩と、みなさんには頼みとするものがいっぱいあります。それを『魂』に変えて、挑んでもらいたいと思います。」昨年の文も、一昨年の文も『コナ中プライド』とはどんなことなのかを説明していますが、一昨日の体育祭を見ていて、究極（キュウキョク：物事をつきつめ、きわめること。また、その最終の到達点のこと）の『KONA © PRIDE』がどういうことなのかがわかったような気がします。

閉会式に、各軍団長から話がありました。紅軍の_____くんも、青軍の_____くんも、同じように感謝の言葉を述べていました。戦ってくれた相手の軍に対して、自分についてくれた同じ軍の仲間に対して、そして支えてくれた先生や家族に対して「ありがとう」の気持ちを言っていました。まさしく、『KONA © PRIDE』とは、「感謝すること」だったのです。「幸せでいることは感謝にはつながらないが、感謝は幸せにつながる」「感謝は『この経験があつてよかった』と心から言えること」「感謝する心は、物事を当然などと思わない」等々、「感謝」に関する言葉や考えはいっぱいありますが、何よりも大切なことは「謙虚な心」がなければ真の「感謝」にはつながっていかないということです。表面的に感謝するだけでは、“心の成長”もないですし、相手にも絶対に伝わりません。団長の_____くんや_____くんもそうですが、特に3年生は最初の3大行事である体育祭を成功に導くことができたのは、自分達の力であることに自信を持ちながらも、協力してくれた後輩やサポートしてくれた先生や家族、仲間に感謝しつつ、次の目標に向かってほしいと思います。体育祭が終わったからといって、そこで得た力や自信をリセットすることはありません。それを土台にしてください。1・2年生も同様です。『KONA © PRIDE』とは「感謝すること」ですよ。

ひとり言特集「体育祭編」

体育祭は、大成功のうちに無事終了しました。その原動力となったのは、やはり最上級生としての3年生の力だったと思います。そして、それを精一杯サポートした2年生、クタクタに疲れながらも「楽しいです」と前向きに頑張った1年生と、それぞれの学年の力も忘れることはできません。

きょうは、2学期最初の「希望の鐘」ということと、体育祭が終わったことで、「ひとり言特集の『体育祭編』」としたいと思います。

●体育祭や運動会には、いろいろな技能走（個人種目）があります。障害物競走は代表的なものですし、私が小・中学生の頃は「パン食い競走」や「ドジョウつかみ」というようなものもありました。高校生の頃は、「さかだち走」や「自転車遅乗り競走」というのまでありました。ようするに、徒競走は走ることが得意な人が転ばないかぎりは勝つのですから、そうでない「意外性」のある条件を競技に取り入れることによって、走ることが得意でない人にも勝機（ショウキ：勝つことのできるチャンス）が訪れるというのが技能走の面白みです。その中で、私が特に好きなのは「借り人」競走です。今回は、2年生が平均台やブルーシートを用いて障害物競走の要素も取り入れながら、最終的には「借り人」の結果が勝敗を分けるような競技にしていました。「バイレーツ・オブ・借り人やん」という種目名ということで、私も海賊の船長役で少しではありますが参加させていただきました。いろいろな「借り人」の条件があった中で、「男性の先生」という条件では、近くにいる男の先生は

先生しかいなかっただけで、3回も走ることになりました。完治（カンチ：「かんじ」とも言う。病気やケガなどが完全に治ること）していない足が大丈夫か心配でしたが、さすがというスピードで走っていました。ダグラスさんも、「サングラスが似合う人」という条件で走りました。条件の中で私が「いいな」と思ったのは、「かわいいお母さん」というものでした。私の前任校の大間町の中学校では、やはり「借り人競走」があって、必ず「美人のお母さん」というものがありました。その中学校の保護者は、自分の子どもと一緒に走りたい方ばかりでしたので、たいていの条件に自ら進んで参加します。「美人のお母さん」というカードを引いた男子が、途方に暮れて（トホウニクレル：どうしたらよいか手段が思いつかないこと）いると、その生徒のお母さんが勢いよく飛び出して来て、強引に自分の息子の手をとって走り出すということもよくありました。大変ほほえましい光景です。中には、「何が美人だ…」と不満顔でブツブツ言いながらイヤイヤ走って来る生徒もいましたが、そういう生徒には「おまえのお母さんは十分に美人だよ」と私は言っていました。今回は、「かわいいお母さん」というカードがあり、それを引いた生徒は2名でした。一緒に走ってくれた保護者の方、本当にありがとうございました。

●運動会や体育祭の最後を飾るのは、たいていリレーです。今回も、男女ともに盛り上がったのですが、圧巻（アッカン：全体の中で最もすぐれた部分のこと）だったのは、男子のリレーだったと思います。前日の予行では、紅軍のアンカーである [redacted]くんにトップでバトンがわたったので、[redacted]くんの本来の力を見せる部分はありませんでしたが、その走りを見て「トップでこなくとも、50mくらいなら抜くかもしれないな」と思っていました。まさしく当日の展開は、3番手でバトンがわたり、80mくらいも離れていきました。それでもグングン加速した [redacted]くんは、最終的に青軍の [redacted]くんとデットヒートを繰り広げながらも、ゴール直前で抜き去ったのでした。その [redacted]くんの力感あふれる走りも素晴らしかったのですが、私は [redacted]くんの最後の粘りもすごかったと思います。それがあったからこそ、リレー全体が盛り上がったのです。紅軍は優勝しましたが、競い合った青軍がいたからこそ、体育祭が成立したことと同じでした。 [redacted]くんも [redacted]くんも、そして紅軍も青軍も、本当にお疲れさまでした。

●今日の私の似顔絵は、年 組の [redacted]さんに描いてもらったものです。技能走の「借り人競走」に参加した [redacted]さんですが、いろいろなところをさがしているようでしたが、なかなか借り人を連れてきません。ようやく大人の男性と一緒にやってきましたが、そのカードには「あこがれの人」と書かれていました。近くにいた [redacted]先生が、「あっ、 [redacted]さんのお父さんだ」と叫んでいました。もしかしたら、誰でも連れて来たら上位に入賞するかもしれないのに、「あこがれのお父さん」と一緒に走ったところに [redacted]さんの心の強さを感じました。そして、そんな [redacted]さんと一緒に走れるお父さんも、本当に幸せだと思いました。娘のいない私にとっては、最高にうらやましい一場面でした。